

松谷敏雄先生と東京大学イラク・イラン遺跡調査団

西秋 良宏

Obituary for Professor Toshio Matsutani (1937–2015):
Archaeologist, the Tokyo University Iraq-Iran Archaeological Expedition

Yoshihiro NISHIAKI

東京大学名誉教授松谷敏雄先生が2015年6月12日、逝去された。お生まれは1937年3月4日、福岡県。東京の私立武蔵高校から東京大学に進まれ、同東洋文化研究所にて長らく西アジア考古学の教育・研究に尽くされたところである。78年間の生涯であられた。1986年に初めてご警咳に接して以来、実に30年間も指導いただいた者として、改めて、これまでの学恩に御礼申しあげ、ご冥福をお祈りする次第である。

松谷先生のご経歴は別に詳しい（松谷1997; 西秋2015）。長きに渡った研究生活におけるご功績を筆者なりにながめれば、西アジア考古学に関しては大きく三つ指摘できる。第一は、新石器時代初期農耕村落の研究である。メソポタミア平原そしてイラン高原における農耕村落出現過程を、現地調査で得られた生データを駆使して緻密に再構築なされた。先生が初めてイラクに足を運ばれた1960年代当時、メソポタミア平原最古の農村はハッスーナ（Hassuna）文化に始まるとされていた。サラサート（Thalathat）遺跡の調査成果をもとにハッスーナ文化には実は先段階（「サラサート期」）があったことを指摘されたのは松谷先生である。また、イラン南部高原で最古の農耕村落社会とされていたジャリ（Jari）文化が、実は、それに後続するとされていたムシュキ（Mushki）文化よりも後の文化であったことを本格的に論じられたのも先生である。さらには、サラサートと同じ初期農耕村落文化が北イラク・ティグリス河流域だけでなく、東北シリア・ハブール河流域にも広がっていたことを明らかになされたことなど、このテーマにかかわる研究業績は多々あげられる。

第二の大きな貢献は、東京大学イラク・イラン遺跡調査の総括作業である。故江上波夫教授（1906–2002）によって推進されたこの調査は東京大学の調査というだけでなく日本の西アジア考古学の基礎を形作った一大事業であり、それによって収集された資料は向後、入手不可能となった巨大な一次コレクションをなしている。上記、松谷先生の原始農村研究の多くもその一環としてあげられたものである。同調査団の成果の保全と活用が十全になされねばなら



お若い頃の松谷敏雄先生。
ヨルダン、ペトラ近郊にて（1966年）。東大総博 TM08.05.05。

ないことは明らかである。筆者の勤務する東京大学総合研究博物館では、その目録化作業を実施しているが、大きな力となってくださっていたのが松谷先生であった。総合研究博物館終身学芸員として、毎週水曜日に来館され、調査当時のことを知る生き字引として相談にのってくださっていただけでなく、自らも様々、お調べいただいた。筆者らの作る目録の校正作業も一手に引き受けていただいていたし、必ずしも明確ではない半世紀も前の調査記録を精査し、収集遺物の出所や写真の被写体をつきとめる作業は、実にお亡くなりになる1ヶ月前まで続いていた。

そして第三にあげるべきは、シリアという現地調査先を拓かれたことであろう。先生の言を借りれば、「イラク・イラク戦争の終結を首を長くして待っていたが、終結する気配を見せないの…調査地をシリアに切り換えることにした」とのことである（松谷1989: 1）。考古学分野の研究

進展には、たとえどんなに博物館資料に恵まれていたとしても、やはり現地調査が欠かせない。フィールドでしかわからないことは山とあるのであって、資料研究で生じた疑問を解決するにも多くの場合、新たなフィールドワークが決定的役割をはたす。後進育成に最も効果的なのも現地調査に若手を参加させることであろう。シリアへの転戦を通じて、イラク・イラン調査中断後も続いている今の東京大学の西アジア初期農耕村落調査の基礎を作ってくれた。

振り返ってみれば、初めてお会いした頃の筆者はネアンデルタール人石器に夢中な視野狭き大学院生であって、新石器時代遺跡を研究なさっていた松谷先生のお仕事は遠く感じていた。先生の講義にでてみようと思ったのは博士課程に進学して余裕が出たせいだったのかも知れない。講義は土曜日の午前、受講生は2人。東京大学東洋文化研究所の研究室で、先生自ら煎れくださったお茶をいただきながら、小さな机をはさんで面と向かっての講義であった。シリアの新石器時代遺跡の報告論文をどっさり読まされ、1学年下の猪俣健君（現アリゾナ大学教授）と交互に遺跡あるいはテーマごとに概要を報告していく形式だった。美食家であった先生らしい上等な昼食を近所の和食屋でごちそうになりながら続きのお話をうかがうこともあった。正直言えば、内容はよく覚えていない。しかし、たいへん魅力的であったに相違ない。1987年からは先生の主宰するテル・カシュカシヨク（Tell Kashkashok）遺跡の発掘に参加させていただく機会を得て、シリア新石器時代の研究が博士論文のテーマにもなってしまったのだから筆者にとっては研究人生の転機であったに近い。

テル・カシュカシヨク遺跡発掘の最初のシーズンを思い出す。1984年に赤澤威先生（当時総合研究資料館助教授）の主宰されたドゥアラ（Douara）洞窟の調査を経験し、1986年にも資料調査に出かけていたから筆者にとってシリア調査初体験というわけではなかった。松谷先生の調査は、理学部仕込みの赤澤先生とはスタイルが全く違っていたことが思い出深い。調査車両は東洋文化研究所が所有するトヨタのランドローバー。それを事前にイスタンブールまで船出させた。それを荷揚げし、運転し、シリアのハッサケまで運ぶのに2週間ほども要した。送り返すにも同じ手続きが必要だったのだから、移送を担当した故古山学（当時東洋文化研究所技官）、藤井純夫（現金沢大学教授）両氏は都合、1ヶ月近くも浪費したことになる。現地滞在が4ヶ月半もある長期調査とは言え、今では考えられない時間の使い方である。団員にスーツケースが支給されたのにも驚いた。ランドローバーで移動する際、形がまちまちだと荷台に積みにくいから、皆が同じ形の角張ったスーツケースを持って行くのだとのことだった。当時としてもレトロな布貼りのスーツケースでデザインは好きだったが

キャストが時代遅れなほど小さくて頼りなかった。加えて、皆と同じスーツケースをもつのが嫌で、一人、色違いで大きめのサイズを注文した筆者は差額を自費で支払いを命じられた。出国の際にはまず東洋文化研究所に集合。関係者に壮行会を開いていただき、その後、ハイヤーで羽田の東京シティエアーターミナル（TCAT）に皆で向かった。

大時代的な行程は現地に着いてからも続いた。まず、シリアの風土になれねばなりません、ということでシリア到着後も遺跡に行く前に1週間以上も各地を巡検した。発掘終了後にも巡検をおこない、多数の遺物を表面採集した。発掘期間中も、現地の人と同じように生活しようとの方針のもと独特な生活を送った。贅沢はいっさいなかった。ミネラル・ウォーターを買わず、ハブル河の水を素焼きの瓶に入れて冷やして飲んだ。ハブルは清流ではない。岸の水は汚いからと言って人夫が着物をまくって中程までじゃぶじゃぶ進んで汲んできた水をそのまま飲んだ。運転手も自前だった。筆者もふくめ、皆が交代で危険なシリアの道路を運転した。都市に出た時や巡検の際にとまるホテルはいつも合部屋だった。ダマスカスで定宿だったスルタンホテルのオーナーが、なぜプロフェッサーが学生と同じ部屋に泊まるのか、本当にいいのか、と予約した私に聞いたことを思い出す。

今、思えば、筆者らが文献でしか知らなかった東京大学イラク・イラン遺跡調査団のやり方だったのだろう。松谷先生にとってもテル・カシュカシヨク発掘は団長として臨まれる最初の現地調査であった。江上波夫先生時代に学ばれた調査のノウハウが投影されていたように思う。1964年に初めて先生が初めてイラク、サラサート調査に参加なさった頃、日本円がいかに弱かったか、現地も日本もインフラが整っていなかった頃の発掘やサーベイの苦労話は何度もうかがった。

テル・カシュカシヨク調査の後、フランスの調査隊に参加するなどを経て1993年からは次の調査ステージが始まった。ユーフラテス河、ティシュリーン・ダム水没地区の調査である。今度は、オーガナイズしてみなさいとおっしゃってください、全てをまかせていただいた。遺跡探しの踏査には同行していただいたが、テル・コサック・シャマリ（Tell Kosak Shamali）遺跡を選定して最初の発掘の年、1994年のシーズンは、先生は遅れて参加された。古物局との交渉やインスペクター、人夫、料理人、宿舍探しなど、全て整ってから参加しますとのこと。筆者は先発の任をになうと同時に、帰国まで緊張のシーズンを送ることになった。テル・カシュカシヨクのように5ヶ月近い調査ではなく1ヶ月半の滞在。運転手を雇う。ミネラル・ウォーターを買う。英国留学時に覚えたハリス・マトリッ

クス法にしたがったローカス発掘法等々…。今では当たり前のことばかりのことも含め、他にもさまざま、カシュカシヨク時代からはやり方を変えさせていただいた。それを反面教師にしたに近いことも否定できない。

先生はほとんど全てを受け止めてくださったのだけれども、二つ、忘れられないことがある。どちらも学生にかかわることである。当時30代前半で若かった筆者が集めてくる調査参加者は、筆者よりもっと若かった。学部学生も含まれていた。彼らには何の落ち度も無いのだが、その知識や生活態度は、かつて日の丸の小旗にふられて覚悟を決めて日本を出た先生の目にはあり得ないことだったという。あなたは海外調査をどう考えているのですか、とアレppoのラムセスホテルで説教された。もう一つ。学生は過酷な現場で次々に体調を崩し、ほぼ全員が寝込んだ。毎週のように筆者がアレppoの病院につれていくこととなった。回復すれば遺跡に連れ帰るのだけれども、それでも寝たきりで発掘の戦力にならない参加者もいた。筆者は日本に帰してもよいのではないかと発言したが、それを松谷先生が止められた。参加者は皆が重い責務を負っているのです、最後までやりとげさせてあげなさい、と。

そういうことなのだ。海外に出かけて発掘調査させていただいていることに自覚と責任を持って。研究費も潤沢になり、かつ海外渡航が楽になった今日、海外学術調査の意味は完全に変貌している。大仰で時代がかった旧式の調査から昨今のお気軽調査まで。筆者は、そして松谷先生は、その移行期に立ち会っていたのだろう。調査研究の質であれ、現地社会との関係であれ、あるいは日本の学術に対してであれ、どんなに豊かになっても背負っているものを忘れないようにしなさい。常に背筋を伸ばし、物静かで口を開けば厳しい先生にはそんな気概を教えていただいていたのだと思う。

松谷先生が開拓されたシリア東北部の遺跡調査は、その後、サラサートよりも古い、北メソポタミア最古の初期農耕村落セクル・アル・アヘイマル (Seker al-Aheimar) 遺

跡の発見、調査へとつながった。加えて申し述べさせていただければ、松谷先生の発掘に参加した当時の若手学生の多くが今では職を得て、西アジア考古学に貢献するにいたっている。先生にしてみれば欣快ではなからうか。「フィールドをシリアへ切り換えるよう強く主張したのは、…故深井教授であった」(松谷 1989: 18) と書いておられるのは、自己顕示を嫌われた先生のお人柄ゆえであろう。しかし、先生自身、調査地の変更を大きな事績と考えておられたことは、1997年3月の最終講義(研究発表会)の演題、「ティグリスからユーフラテスへ」にも現れていた。イラク領ティグリス河流域サラサートの調査に始まり、シリア領ユーフラテス河流域コサック・シャマリ調査で現役を終えられたこと、その経緯や意義を感慨深く述べられていたことも思い出す。

奇しくもその両地が、またしても政情不安に陥っているさなかに松谷先生は旅立たれた。長引くかも知れない今度の難局については先生も気にかけておられた。シリア支援のための民間団体への募金もなさるなど現地の友人たちのことをお忘れになることもなかった。悪化する現地情勢への憂いを交わすことすらかなわなくなった喪失感を述べるのは詮ない。今後の日本の西アジア考古学調査についてはどのようにお考えだったのかについても、明確にご意見を伺っていなかったような気がする。とは言え、相談したとしても、冷静で、かつあっさりしておられた先生であれば、何も心配していません、あなたたちが何とかするでしょう、とおっしゃるように思う。それもそうだなと自らに言い聞かせつつ、御指導を偲んでいるところである。

参考文献

- 西秋良宏 2015「松谷敏雄先生のご逝去にあたって」『オリент』58巻1号 97-98頁。
 松谷敏雄 1989「テル・カシュカシヨク2号丘の発掘」『東京大学東洋文化研究所紀要』109冊 1-33頁。
 松谷敏雄 1997「松谷敏雄教授略歴・主要著作目録」『東京大学東洋文化研究紀要』133冊 3-9頁。

西秋 良宏

東京大学総合研究博物館

Yoshihiro NISHIAKI

The University Museum, The University of Tokyo